

# 生活文化史 Seikatsu Bunkashi

<史料館だより>

## 目 次

- |                            |            |
|----------------------------|------------|
| ◇威容を誇った深江温泉.....           | 大国 正美 (2)  |
| ◇明治期、深江小学校の教科書発見.....      | (4)        |
| ◇戦前に青木にあった弓道場と太田丙子郎.....   | 五賀 友継 (5)  |
| 一大日本弓道会武庫支部を中心の一           |            |
| ◇深江物語 (7)                  |            |
| 深江文化村界隈の今昔.....            | 森口 健一 (11) |
| ◇「べっぴんさん」と史料館.....         | 道谷 卓 (18)  |
| ◇史料館の今後                    |            |
| 児童館と図書館ステーション機能併設について..... | (20)       |
| ◇この一年.....                 | 藤川 祐作 (22) |
| ◇史料館日誌抄.....               | 道谷 卓 (24)  |



2017.3.31

NO.45

(第251号) 第二回 記念写真集『名所案内』

明治から昭和前期にかけて、阪神深江駅北側に「深江温泉」があった。「名所案内」などにも記述がある有名な温泉だったが、これまで写真などは知られていなかった。しかしこのほど、明治末期から大正前期に絵はがきが作成されていたことが判明した。大規模な2階建て、本瓦葺きの本格的な浴場だったことが分かる。

神戸深江生活文化史料館

## 威容を誇った深江温泉

史料収集部 大国正美

名高き「深江温泉」

表紙の絵はがきの写真を見てみよう。万国旗に提灯がぶら下がり、屋根に男性が四人登り、左端には薔薇が三〇樽も積まれている。建物の前には多くの住民が集まっている。おそらく、深江温泉の建物が新築されたことを祝った絵はがきだろう。

深江温泉は、明治四十一年（一九〇八）発行の西垣発刊『阪神電気鉄道沿線名所案内』に詳しく書かれ、広告も掲載されている（図1）。以下、紹介文を引用する。

名高き深江温泉は停留場の北方数百間、園の間に位し稻荷神社を隔て、海岸を距る約一丁、砂礫質の地中より湧噴し其温度は氯酸鉄氏八度の際、同十七度を示す。水は透明にして臭氣なく鉄味を具べ、放題し若しくば煮するときは、白濁して終に黃褐色の沈淀を生す。反応初め酸度の際、同十七度を示す。水は透明にして臭氣なく鉄味を具べ、放題し

閑雅肅靜

風光絶佳

阪神間最良温泉

深江温泉

深江停留場ヨリ十數間

図1 深江温泉の広告

○〇三なり。而して之れが定量分析を見るに毎千分中に検出せる固形物の総量は〇・一二八分にして主として重炭酸鉄より成る。左に大阪衛生試験所の実験せし各成分の含量を載す。

クロールナトリウム ○・〇・八 塩酸カリウム ○・〇・五

炭酸ナトリウム ○・〇・三 塩酸カルシウム ○・〇・六

炭酸鉄 ○・〇・一六 鋼土 ○・〇・一

珪酸 ○・〇・四五 遊離及半結合炭酸 ○・三六〇

爾他硫酸、磷酸、マンガン等各痕跡

以上の量分を以て之れが効能を微するに月經不順、子宮病、流産

性、神經衰弱等に尤も適す。實に近畿に名高い温泉なり。

『阪神電気鉄道沿線名所案内』には、深江駅の北「十数間」とあり、

駅のすぐ北に当たる。一方表紙に紹介した絵はがきには「電車停留所ヨリ半丁」となつていて五〇余り。位置は微妙に食い違う。ただ効能はびつたり一致している。

絵はがき製作年代は明治末期から大正前半

絵はがきの表面のレイアウトは、図2のように通信欄が表面の三分の一程度に拡ぐ設定されている。これは明治四十年（一九〇七）四月から大正七年（一九一八）三月の間に製作されたものとされる。また「郵便はがき」となつていて「が」が清音になつてゐるのは昭和八年（一九三三）以前のものだという。

以上のことからこの絵はがきは明治四十年四月から大正七年三月の間れたと考えられる。

このはがきは、元宝塚市史編集室主査だった若林泰氏が収集したものである。宛先の加古郡大野村の荒木郁子は、現在の加古川市加古町大野にあった江戸時代以来の名家、荒木家の家人で、荒木家は若林泰氏とは縁戚にあたる。



図2 絵はがきの表面

通信欄が抜く明治40年から大正7年の製作と推定される

### はがきからよみとれる深江温泉

つぎにはがきの投函年代と書かれている文面からわかる深江温泉を考えてみたい。はがきの消印は御郵便局で、年月日は「13・8・11」か「13・8・11」のよう読めるが、残念ながら年代部分がはっきり読み取れない。ただ使われている切手は、中央に菊の紋章がデザインされた一銭五厘の菊切手。菊切手が発売されたのは明治三十二年（一八九九）から明治四十一年だが、郵便料金は昭和十三年（一九三七）まで一銭五厘の時代が続いており、「13・8・11」か「13・8・11」なら、明治四十三年か大正十三年（一九二四）に投函されたということになる。製作年代とは大きくずれていない。

差出人の中村子代は「深江温泉場ニチ」と表記しており、当時深江は「温泉場」と呼ばれていたことが分かる。またはがきの文面では「私は昨日から□□へまいりました。□□へいつて員などひろって遊んでばかり居ます。大変涼しいですけれど蚊が多いのでこまつて居ります」と深江温泉での滞在の様子が記されている。

つきにはがきの投函年代と書かれている文面からわかる深江温泉を考えてみたい。はがきの消印は御郵便局で、年月日は「13・8・11」か「13・8・11」のよう読めるが、残念ながら年代部分がはっきり読み取れない。ただ使われている切手は、中央に菊の紋章がデザインされた一銭五厘の菊切手。菊切手が発売されたのは明治三十二年（一八九九）から明治四十一年だが、郵便料金は昭和十三年（一九三七）まで一銭五厘の時代が続いており、「13・8・11」か「13・8・11」なら、明治四十三年か大正十三年（一九二四）に投函されたということになる。製作年代とは大きくずれていない。

この文面で判明するのは、深江温泉は日帰りではなく宿泊しながら滞在したこと、入浴の合間には海岸で貝拾いなどを楽しんだこと、涼しいが蚊が多いことなどを記載している。今は忘れられた湯治と運営を兼ねた深江の夏の過ごし方の一つだった。

### その後の深江温泉

深江温泉は、地元の聞き取り調査では、大正時代に廃業、檜のよくな建物がそびえ温泉小屋が昭和十年代まで残っていたという（木本庄村史「地理・民俗編」）。塗はがき面には深江温泉の電話番号として「御影一五一」とあるが、大正十一年の御影局の電話番号簿（国立国会図書館蔵）には深江温泉は記載がないので、大正十一年以前に廃業したのだろう。

大正十一年（一九一三）の『阪神聞名勝史』や昭和三年（一九一八）の『阪神便覽』には深江温泉の記述はないが昭和五年の安治博道・福原源次郎編『神戸附近名勝案内』には記述が復活している。

見されしものにして妙寶院、地中より湧出、其溫度は氣溫攝氏八度の際於て同十七度を示し、透明にして碧氣なく、鉄味を帶び、婦人病と神經衰弱とに効験ありと、來つて浴するもの數を増しつゝあり

明治四十一年の『阪神電氣道沿線名所案内』とはほぼ同様の内容になっている。また深江にかつて在住した林好子氏（大正十三年生）によると、この絵はがきを見てもらい、大西培子氏が聞き取ったところでは、深江駅北に深江温泉と呼ばれる浴場が昭和初期にあったが、建物はこの絵はがきのよう立派な建物ではなかったという。

昭和五年の『神戸附近名勝案内』の「来つて浴するもの数を増しつゝあり」という表現を信じるならば、大正期にいったん廃業したが、昭和初期に温泉小屋を建て直し復活させた時期があったのかもしれない。引き続き調査をしたい。

## 明治期、深江小学校の教科書発見

前号の本誌で紹介した松田直一氏関係資料について、古文書を除く図書資料・郷土資料の整理が終わった。資料は大きく分類して、松田家の系譜資料、松田直一の地域史研究にまつわるもの、教師生活に関するもの、直一の長男で同じく教師だった博智氏の教育活動に伴うものに分類できる。

教育関係資料は、明治末期から戦後まで幅広い時期の教科書が多く、兵庫教育大学附属図書館にも所蔵していない貴重なものが含まれおり、大半を大学に寄贈することになった。附属図書館には教材文化資料館という展示施設があり、その中で、「学校生活」というコーナーの展示候補との返答をいただいている。一方、前号で紹介した藩札・私札などの古紙幣資料や古文書、また郷土資料は史料館所蔵品として、そのほかの一般的な日本史資料などは国立奈良文化財研究所に贈られた。



「深江校藏書」の墨書きのある「地理初步」



「深江小学校」公印



「小学校幹事」の印

史料館で収蔵する資料のうち、今回は、明治前半の「深江小学校」の藏書印のある教科書を紹介したい。これは明治七年（一八七四）刊行の小学校高学年向けの地理の概説書「地理初步」である。

深江小学校は、明治初期に深江の正寿寺に設立されたもので、明治三十二年創立の本庄小学校の前身にある。明治五年八月に学制の公布により、全国は八大学区に分かれ、兵庫県は大阪・京都など二府十県で第三大学区に属した。うち揖津国、すなわち現在の阪神間から神戸市須磨区までは第二番中学区になつた。深江小学校は深江村・中野村・森村・津知村の四カ村を区域としていた。

「地理初步」の表紙には「深江校藏書」と墨書きされ、中に「第一式（一） 大学区 第廿式（二） 中学区 深江小学校」と「深江小学校」の朱印が押されている。「第一式大学区 第廿式中学区 深江小学校」の朱印は、明治九年、同年の深江小学校の卒業証に押されている公印で、図書が学校の財産として厳重に管理されていたことが見える。一方裏表紙には「松田伊佐（いさ）」と個人名が書かれている。

松田いさは、慶応二年（一八六六）松田家に生まれ、広田社人の田村家から入った養子が家督を継ぎ、直一を生んだ。このことから明治セロ年代に使われた教科書であることが判明する。「深江校藏書」と個人名との関係は明治初期の教科書の使われ方の観点からも興味深いが、今後の課題である。

（文責・  
大国正美）

## 戦前に青木にあつた弓道場と

太田丙子郎

—大日本弓道会武庫支部を中心に—

筑波大学学院 五賀友繼

筆者は、平成二十八年度（筑波大学大学院人間関係科学研究科体育学専攻修士論文において、「大日本弓道会に関する歴史的研究」と題して、明治期から戦前昭和期に存立した弓道団体である「大日本弓道会」に関する史的研究を行った。調査を進める中で、大日本弓道会武庫支部と、その設立者である太田丙子郎が阪神電駅の近くに自宅及び弓道場を構えていたことが明らかとなつた。また、資料収集の過程で、偶然古書店で武庫支部の写真帖を入手するに至り、これらを松尾牧則准教授（筑波大学体育系）を通して、吉原大作氏（尼崎弓道俱楽部）に提供した所、更なる追加資料を得るとともに、大國正美・神戸深江生活文化史料館館長紹介を受けた。

明治維新以降の近代弓道史を体系的にまとめた研究は、管見の限りなく、地方における弓道活動の様相は未だ明らかとなっていない。そこで、大日本弓道会武庫支部の様相を明らかにすることは、大正・戦後初期の地方における弓道の実施状況を知り得る上で重要な人物である。また、武庫支部の設立者である太田丙子郎は、後に大日本弓道会理事に就任しており、大日本弓道会史を語る上でも重要な人物である。以上のことから、本稿では大日本弓道会武庫支部及び、その設立者であり支部長でもあった太田丙子郎に関して、これまで明らかとなつ

た史実について論述する。

### 大日本弓道会について

本多利實に学んだ根矢鹿兒（写真1）が、本多利實門下の青年組織として一九〇九（明治四十二）年に「青年弓術会」の名称で東京市小石川区冥下町に発足したのが始まりである。その後、同年七月に「大日本弓術会」と改称した後に、一九一九（大正八）年六月に財團法人の許可を得て、「大日本弓道会」と改称した。設立者である根矢鹿兒（鹿兒は通称。本名は熊吉）は、一八七四（明治七）年茨城県に生まれた。地元の小学校を卒業後準訓導となり、茨城において教鞭をとった後に上京し、東京高等師範学校（現筑波大学）の英語専修科に入学したが中途退学し、和仏法律学校（現法政大学）に入学・卒業した。その後、一九〇四（明治三十七）年四月から一九一四（大正三）年三月まで私立京華中学校において英語及び数学の教師となり、一九一四（大正三）年四月からは日本大学中等部の数学教師を勤め、一九一〇（大正九）年五月に退職、以降は大日本弓道会の運営に専念している。

設立当初、大日本弓道会には明治から昭和初期の著名な弓道家である大内義一・大半善蔵・阿波研造・石原七蔵などが多数所属していた。本多利實の門弟だけでなく、大日本武徳会の流派弓術家、岡内木・浦上栄・窪田藤信なども多数参加していた。しかし、会員の拡大に伴い会員間での競争に關して対立が起つたり、本多利實が一九一六（大正五年）年春頃に大日本弓道会を離れ、さらに一九一七年十月十三日に死



写真1 根矢鹿兒

去すると、本多利賀門下の弟子たちはそれぞれの団体を立ち上げ、以降の大日本弓道会においては根矢鹿兒の下での体制が確立され、終戦まで続いた。

大日本弓道会が育生弓術会として設立された当初、東京市小石川区

宮下町に道場を借りていたが、その後二度の移転を経て「一九一

（明治四十四）年に裏堀・天神山に本部及び道場を完成させ、以降は一九四五（昭和二十）年四月に空襲により焼失するまで天神山を本部として活動した。大日本弓道会は、「一九四三（昭和十八）年八月までに、日本・海外合わせて累計登録会員数三万二六四〇名、四二〇支部を保有する弓道団体となつたが、ここのまでの会員や支部を有する組織に発展した背景には、役員が専属となって事業の一つかとして行っていな宣伝活動がある。大日本弓道会は「一九三（大正十二）年四月に『弓道宣伝部』を設置しており、その目的は、各地に赴き講演・演武を行ひ、弓道の普及と振興を行ふものであった。根矢鹿兒を中心にして数多くの出張が行われ、日本だけでなく海外においても普及活動が行われた。ここまで巨大な団体であったにも関わらず、大日本弓道会の詳細はこれまで近代武道史で語られることはほとんどなかつた。これは、柔道・剣道に比べると、弓道は流派・会派間の対立も相まって、組織化・近代化が遅れており、幕末から明治維新以降の弓術・弓道史を体系的に語るためには、同時期に勢力を有していた各流派・団体組織を見渡さなければならぬが、現在は当時存続していた流派・組織の実態すら解説されていない。従来は大日本武徳会を中心にして研究がなされてきたが、根矢鹿兒は九三四（昭和九）年に制定された大日本武徳会の射法統一政策を巡って対立し大日本武徳会と距離を置いていた。戦後は発足した全日本弓道連盟が大日本武徳会の要人を占められたことからも、大日本弓道会が弓道史でこれまで語られることがなかつた。

なお、戦前降々たる活動を見せた当会は、戦後GHQによる武道禁

止令によりその活動が断絶し、一九四七（昭和二十二）年に日本弓道連盟（現全日本弓道連盟）が発足、一九五二（昭和二十七）年に根矢鹿兒が死去したことにより、大日本弓道会の活動は実質的に終焉を迎えた。

#### 太田丙子郎について

太田丙子郎は、「一八七六（明治九年）年一月十五日に茨城県那珂郡に、小田食伊予之介・佐多子の長子として生まれた。那珂第一高等小学校卒業後、茨城県尋常中学校に入学、中途退学し、「一八九二（明治二十九）年に上京して、高瀬梅吉（当時第一高等学校生）と、瓶氏（名不明）の三人で、東京小石川区に六間町を借りて下宿していた。その下宿先の向かいに太田恒子が住んでおり、息子の太田早苗が第一高等学校生であり、高瀬梅吉と友人であったことから、三人は食事に頻繁に招待されるようになつた。そのうち、太田恒子の娘である太田暁穂と懇意となつて、「一九〇二（明治三十五）年に、小田食伊子郎は太田暁穂と結婚することになった。太田早苗は第一高等学校在学時に死去しており、そのため小田食伊子郎は太田家の婿養子となつて太田と改姓し、太田丙子郎となつた。

太田丙子郎は、上京後に勉学を重ね、「一八九四（明治二十七）年に官立商船学校航海科へ入学、「一八九六（明治二十九）年に英國帆船パルモラル号に練習生として乗船し、横浜からアメリカ、ケープタウン、ロンドンと世界を廻つた。「一九〇〇（明治三三）年一月に航海科を卒業し、同年二月に大日本商船に入社、以降は台湾・香港航路に乘船し、「一九〇七（明治四十）年には陸上勤務に転じ、監督として船員及び船隊の管理を行つた。「一九一〇（大正九）年に四十五歳で専務取締役に就任、「一九一四年（昭和四）年には副社長に就任し、「一九三七（昭和十二）年に六十一歳で退任した。退任後は、海洋学会会長・日本海運報国團理事長を歴任し、戦後は港湾協会顧問・海難防止研究会会長など

どに就任した。一九六五（昭和四十）年十月十日に八十九歳で死去した。

太田内子郎は大阪商船入社後に神戸へ転居しており、一時台湾や大阪に居を構えた後は、一九〇八（明治四十一）年頃に、兵庫県武庫郡本山村に約一反の土地を購入した。ここにも弓道場が設置されていたようであるが、詳細は不明である。一九二七（昭和二）年に弓道場を建設、大日本弓道会武庫支部道場として、弓道場の隣に幼稚園を併設し、弓道場と幼稚園と共に「共学館」と名付けた。

さて、太田内子郎は根矢鹿兒と親父が深かったことから、大日本弓道会会員となつたことが資料から読み取ることができるが、どのようにして根矢鹿兒と出会つたのであるうか。太田内子郎と根矢鹿兒は共に茨城県の出身であるが、それ故那珂郡と茨城町の出身であり、学校も重なつてはいない。筆者は恐らく高瀬梅吉が一人を引き合せたのではないかと考へている。根矢鹿兒は、茨城県那珂郡で一八九三（明治二十六）年頃に教鞭を取つており、當時高瀬梅吉の実家に寄宿していた。その後、根矢鹿兒は中等学校の教員免許を取得すべく、高瀬梅吉を頼つて上京しており、その際に太田内子郎と出会つたのではないだろうか。茨城県人会での交流や、後に根矢鹿兒が台湾や香港へ弓道普及のために渡航することとなつた際には太田内子郎が便宜を図つてのことからも、二人の交流は続いていたものと考えられる。太田内子郎は一九三六年五月一日に大日本弓道会に就任しているが、これに根矢鹿兒と旧知の仲であり、また、太田内子郎の社会的地位が高く、会社を退職した時期と重なつたことから、理事に就任したものと考えられる。

#### 空島高瀬梅吉について

一八七三（明治六）年九月生まれ。茨城県出身。実業家、衆議院議員

員。東京帝国大学を

一八九九（明治三十二）年に卒業後、帝國商業銀行に入

行。後に朝鮮銀行にて大阪・東京支店長を経て、京城本店営業局長となる。その

後、東洋拓殖理事、佐北満電気取締役、佐賀炭礦社長を務め、中島鉱業取締役を兼務した。一九三〇

（昭和五年）、茨城県から民政党の衆議院議員となる。

一九三三（昭和七年十一月二十九日死）六十歳。

大日本弓道会



図1 太田内子郎邸の所在地  
(昭和10年頃の青木・西青木地区)

太田内子郎は一九二七年に自宅内に私費を投じて十五間近い七間の弓道場を備える弓道場を建設し、これを共学館と名付け、大日本弓道会武庫支部道場として発足させた。武庫支部は、一九二七（昭和二）年七月十七日に支部認可、同年九月二十四日に武庫支部発会式及び道場開場式が行われた。道場開場式には京阪神間の射手及び来賓合わせて約一八〇名が集まり、盛大に挙

行された。太田内子郎、根矢鹿兒に統いて、来賓総代として山口覺一（阪神電鉄常務取締役）が祝辞を述べ、根矢鹿兒による射礼、各射手による一手射礼、その後余興として小的「一手・大的」手の競射が行われた。競射の順位は次の通りであった。

一位 那須俊介	二位 河野孫四郎	三位 森澤新三郎
四位 谷川 武	五位 曽和南陽	六位 大橋 美好
七位 小澤 陽	八位 星野 满	九位 尾藤 貞一
十位 浅岡 尚二		



写真2 武庫支部道場（共学館）全景



写真3 武庫支部道場（共学館）右手が道場

このように、太田内子郎の積極的な活動及び支援によって、大日本弓道会は神戸一帯の弓道宣伝普及活動の拠点を得るに至り、同時に一帯の弓道家の活動を支援するに至った。武庫支部はその後、毎月例射会を開催しており、その活動の様子は大日本弓道会の機関誌上において、「一九四三（昭和十八）年二月十四日の二月例会まで確認できる」とがでてくる。それ以降の活動の様子は確認できていないが、大日本弓道会の活動自体が戦争によって収縮しており、各地で空襲も激しくなつて弓道どころではなかったと考えられる。詳細な日付は不明であるが、共学館は空襲によって焼失しており、戦後再建されることはないかった。



写真4 武庫支部道場（共学館）安土



写真5 武庫支部道場から北を望む



写真6 根矢鹿児による射礼



写真7 弓道場周辺の様子

神戸高等商船学校について  
 一九一七（大正六）年九月に深江に川崎商船学校が設立され、後に官立神戸高等商船学校となつた。設立の場所選定に当たって、太田内子郎は深江が最も適当であることを進言すると同時に、校長を商船学校出身者とするように主張した。従来商船学校の校長は海軍軍人が就任していたが、その性質の違いや商船学校出身者の後進を育成していくためにも、この様な主張を行っていた。一九二三（大正一二）年に主張が認められ、小関三平が就任している。

このよう、太田内子郎は神戸高等商船学校の設立から深い関係にあつたが、同時に課外活動として弓道部の指導を行つており、その様子は大日本弓道会機関誌上に報告されている（写真9、10）。  
 まとめ  
 本稿では、大日本弓道会武庫支部と太田内子郎について、現在明らかとなつている史実について論述した。筆者は、大日本弓道会の研究の中で、史料的制限により各地域に設置された支部の全貌やその地域的特徴を詳述できており、各地域における弓道界の様相も同様であ



写真8 神戸弓道部創立第6回弓道大会記念

前から二列目・左から四番目が根矢鹿児、五番目が太田丙子郎。六番目は酒井彦太郎（大日本武徳会範士）と考えられる（昭和7年10月9日撮影）

写真9 神戸高等商船学校弓道部（寒稽古修了記念）  
前列右2番目が太田丙子郎写真10 神戸高等商船学校弓道大会  
(昭和4年11月23日)

る。そのため、本調査によって、神戸一帯では太田丙子郎が多額の私費を投じて弓道場を建設し、周辺の弓道家の活動を支援していた様相を窺うことができた。これは、社会的地位の高い弓道家の私費によって、周辺の弓道の普及と振興が図られていた事実が浮かび上がつて来た。  
最後に、本稿が深江一帯の郷土史を語る上で、武道史・弓道史の側面から論する研究資料として役立つこととなれば、甚だ幸いです。

- 【参考文献】
- 大日本弓道会『弓道』一九一九年～一九四三年
  - 五賀友繼『大日本弓道会に関する歴史的研究』一〇一六年度、筑波大学人間総合科学系研究科攻修士論文
  - 日外アソシエーション株式会社編『20世紀日本人名事典 ソリューションズ』二〇〇四年
  - 太田丙子郎追憶録刊行会編『太田丙子郎追憶録』太田丙子郎追憶録刊行会 一九六七年

## 深江物語（7）

## 深江文化村界隈の今昔

深江塾 森口 健一

## 津知川の河口と三角公園

深江の海岸沿いを、かつての防潮堤沿いを東に歩いていくと、道が北に彎曲しているところに突き当たります。ここは平成の時代まで深江の造船所あるいは上組（かみぐみ）の造船所と呼ばれた東神戸造船所があつた所です。今ではその場所にヨットやモーターボートが置かれています。造船所の西は津知川の河口でした。深江南町一丁目（旧神楽町）と深江南町二丁目（旧東町）は津知川がその境となっていました。

河口から海に向って東側は急な斜面が川面に落ち込んでいました。川面から東に向って高さが三五ほど斜面には草が一面に繁っていました。昭和四十年頃この斜面に沿ってコンクリートの擁壁が作られました。その結果北を底辺とし、南、海側を頂点とする三角形の土地ができたのです。擁壁に面する西側（太田酒造迎賓館跡）の道路を底辺とし、東、造船所側を斜辺とするほぼ直角三角形の空間です。できた空間斜面には大量の土が搬入されて五〇坪ばかりの平らな土地が出現したのです。

その土地は現在では数本の高木と草の繁る一見荒地になっていますが、地域の人はその土地の形から「三角公園」と呼んでいます。公園は神戸市の所有地で新たに土地ができたときから、所在は深江南町一丁目ですが、深江南町二丁目自治会や子ども会などを中心にした人々が、神戸市から散水設備を設置してもらって草花を植えてささや

かな花壇にしてきました。季節ごとに植え替える花の苗や散水のための水道料金は神戸市が負担してくれました。

自治会の役員の高齢化やども会の参加者の減少などによって、現在は行政当局の管理下になりフェンスに囲まれたたの空地となっています。

この土地を有効活用できないかと、地域の有志が集って意見交換したことがあります。その中の提案で「深江文化村を中心としたかつの深江の歴史的な事物の保存や情報発信の場としてそれにふさわしい建物を建てたら良いのではないか」というものがありました。深江には神戸深江生活文化史料館があり、「その分室的な役割と地域住民の会議室を兼ねた建物が良い」などという提案でした。しかし、さまざま

な事情で行政と話し合うこともなく、立ち消えになりました。

## 深江文化村

深江文化村とも齊屋文化村とも呼ばれる一角が現在の深江南町一丁目にありました。この町名は昭和四十七年六月に新住居表示によって、神楽町から変更になりました。地元の人たちは神楽新田と呼んでいました。

深江文化村といわれる場所には大正の終わりから昭和初期にかけて一戸の洋風住宅が建てられましたが、それまでは祇園でやせた土地であったそうです。これらの建物が立つまでは、この場所から南は打ち際まで広い砂浜と松林でした。それは明治時代の地図からもうかがいることができます。深江の浜がかつては白砂青松の海岸といわれたのはこの文化村の南の岸辺が最もふさわしいものでした。

ところで、いつからこの場所が「文化村」と呼ばれるようになったのか、少なくともこのあたりに古くから住む人に聞いても分かりません。ヒントになるのは深江文化村が形成された大正十一年（一九二二）東京での平和博覧会の開催です。その会場の一角に「文化村」という

住宅展示場が設けられました。洋風を取り入れた相洋折衷の住宅が一戸展示公開されました。奇しくも深江文化村が「三戸」、博覧会の展示住宅戸数が「四戸」とよく似た数字になっています。またこの頃には大阪方面でも洋風住宅の展示会が開催されています。大正デモクラシーは国民の洋風文化的生活への憧れをかきたてた時代でした。文化などという言葉は住宅だけでなく「文化包丁」、文化ナベあるいは文化アパートなどという言葉も大流行となりました。

東京の文化村は展覧会終了と共に取り壇されましたが、其面は分譲住宅であったため、「大正時代の洋風住宅が街並みとして残るめずらしい住宅地」とし、その一部を大阪市が「都市景観形成建築物および登録文化財」としています。深江文化村にある富永邸、古澤邸も昭和五十三年の神戸市景観条例に基づき景観形成重要建築物に指定されています。

ただ、昭和の終わり頃までは、地元の人がこの場所を「文化村」と呼ぶことはまずありませんでした。この地域に古くから住んでいる人に尋ねると「そんなハイカラな名前は知らない」外人さんが多く住んでいたから外人村といっていた」という答えが返ってきました。

深江文化村はモデルハウス的な住宅ではなく地主の阪口晶石氏や建築家の吉村清太郎氏の住宅というものに対する思想、建築物の配置や建築様式などに対する考え方の反映であり、更に当時は米国から帰化したウリアム・ヴォーリスの設計思想が神戸市のニュータウンの文化村という名前は単に文化的な生活のための住宅ではなく、そこに住まいった人たちやかわった人々の多くの音楽家を中心とした文化人であつたために「文化村」と呼ばれるようになったのではないでしょうか。ウリアム・ヴォーリスの設計思想が神戸市のニュータウンのシートル村やバンクーバー村の住宅配置にも生きているのです。

それら「文化人」の多くは、シベリア経由でロシア革命などを避け

てわが国にやってきた白系ロシアあるいはユダヤ系の人々です。その人たちの中には音楽家もいて周りには音楽家を志す日本人が多く集うことになったのです。

ちなみに、深江文化村の敷地全体はやせ地ではありました。地元の方が地主の阪口氏から無償に近い条件で借りて綿花栽培の土地として使用していました。近所の漁業を営む家の主婦が、市場に出すほど高品質でもなく大量生産でもなく、自分で収穫して自らにして魚網の一部を利用していました。深江の沖で大量に水揚げされたコノシロという魚を対象にした漁網です。コノシロは鱈より一回り大きな魚で、今日は寿司ネタとして高級魚といってもよい魚です。ただ、綿花づくりとしてこの敷地を利用していたのは、文化村ができるまでの短い期間であったそうです。

#### 深江文化ハウス

深江文化村から少し南西の海岸沿い、現在の太田酒造の敷地に文化ハウスと呼ばれる建物がありました。昭和初期のわずか四、五年間のことです。この建物は明治の終わり頃に大阪の医師の別荘として建てられました。松浦幹一という人が経営し、昭和十三年の本庄小学校卒業生の記憶によって作られた地図には「松浦文化ハウス・洋風仕出し」と記載されています。長期滞在が可能な宿泊施設と洋風レストランをかねたハイカラなものだったと伝わっています。

深江文化村のヨーロッパ系の音楽家にかかわりのある異人さんたちで文化村という名前は単に文化的な生活のための住宅ではなく、そこに住まいった人たちやかわった人々の多くの音楽家を中心とした文化人であつたために「文化村」と呼ばれるようになったのでないでしょうか。ウリアム・ヴォーリスの設計思想が神戸市のニュータウンを構成する文化村に集った音楽家の一人で、唱歌「赤んぼ」の作曲などで知られている山田耕作の招きで、昭和四年シベリア鉄道で来日しました。来日の途上、シベリア鉄道の中で偶然出会ったのが、深江文化村で音



写真1 神奈町在住の画家福井市郎が描いた文化ハウス  
(「芦屋浜風景」より)

親子がよ  
浜辺で  
十三年の  
本庄小学  
校卒業生  
は、夏に  
は深江の  
彼女は、昭和四  
年のときで  
す。ペア  
テの自伝  
には一切  
深江の事  
は出てき  
ません  
が、ペア  
チと同年  
齡の昭和  
十三年の  
本庄小学  
校卒業生  
は、夏に  
は深江の  
浜辺で  
親子がよ

樂を学びヴァイオリンの天才とも称されながら惜しくも夭折した貴志康一です。一人はすっかり意氣投合しました。レオ・シロタは東京の乃木坂に居を構え戦後も日本に住んでいました。そして度々関西にやっては貴志康一氏と瀬戸内海の著名人の邸宅でピアノ演奏をしました。レオ・シロタをはじめとした西洋の音楽家たちは、深江文化ハウスで故郷の料理を思われる料理と共に、家族ぐるみでペーネティーをしたそうです。レオ・シロタには大正十二年生まれの一人娘がいました。名前はペアチ・シロタです。両親と共に日本にやってきたのは昭和四年、六歳のときで、す。ペアチの自伝には現憲法にかかわっていたとは大きな驚きでした。

く遊んでいた」といいます。別の人的话では「ペアチちゃん」と呼ばれた女の子が深江や芦屋の浜で親子で遊んでいたとも聞きました。彼女は、昭和十四年、一五歳のとき渡米します。そこで名門女子大学G.H.Q.の要請によるものであり、を出で日本敗戦と共に来日します。G.H.Q.の要請によるものであり、父のレオ・シロタが日本にとどまっていることも気になっていたせいです。ペアチ二歳のことです。

G.H.Q.から日本国憲法作成の手伝いを要請されます。幼いころに日本に住み、日本人と交わることの多かった彼女、女性の視点からの憲法草案作成が期待されたわけです。彼女の所属は「人権に関する委員会」です。彼女の意見は日本国憲法の第二四条として実を結びました。しかし、筆者にとっては法律の全くの素人のわずか二歳の女学生とも思える人が現憲法にかかわっていたとは大きな驚きでした。

戦前に深江文化村には亡命ロシア人を中心としたヨーロッパ系の人たちが住んだことはいろいろな冊子などで周知の事で、その多くは音楽家でありわが国の音楽の発展に少なからず貢献したことは間違いないことです。また貴志康一作曲の「竹取物語」が湯川秀樹博士のノーベル賞受賞時の晩餐会に流されたこと、国民栄誉賞受賞者の服部良一の「青い山脈」というヒット曲が深江文化村から芦屋駅に向う途中に目にした六甲山の緑が作曲のイメージにつながったという話も残されています。

しかし、こうした音楽家の活動について地元深江ではあまり知られていないのが実情です。高校の音楽の先生に尋ねると「音楽史を専門に学んだ人なら知っているかもしれないが、いま音楽を学ぶ人にとってはほとんど関心をよせる者はいないのではないか」という答えが返ってきました。

### 工場施設で文化村に仮住まい

深江文化村の住宅は大部分が賃貸住宅でした。昭和十年代に入ると、賃借人である外国人の人々は次々とその住宅から去っていきました。外国人が去っていく寂れた様子は当時の新聞記事にならほどです。

その空き家の一軒に本庄村深江の人のが假住まいしました。昭和十七年、本庄の海岸沿いに川西航空機甲南工場の拡張工事が行われることになり、拡張される区域に住んでいた人は立ち退くことになりました。代替地は阪神の芦屋駅近くに設けられましたが、新しい住宅ができるまでの仮住まいとなつたのです。その方は、「お隣のドイツ人ベルマンさん」と話したり、「前も海で泳いだり……」と語っており、戦時中でも近所付き合いがあったことがわかります。

### 異人さんからのプレゼント

一方で依然として文化村に居を構えている異人さんもいました。その人たちは深江の人々からみれば豊かでハイカラな生活をしていました。

昭和三十年になるかなならないかの頃、ある異人さんの家に深江の一人の女性が女中奉公に行きました。そこで日常の家事手伝いをしながら西洋料理の手ほどきも受けました。奉公に行った女性が料理好きということもあって雇い主の異人さんと非常に仲良くなりました。ある日その異人さんは彼女にガスオーブンをプレゼントしてくれました。その女性の孫に当たる女性は「オーブンで焼く鳥料理など非常にめずらしく、祖母が焼いてくれたその味は今でも忘れられない思い出です。そのオーブンは使わなくなつてからも阪神・淡路大震災の頃まで大切においてあった」と語ってくれました。

### 英会話を習った話

文化村の近くに住んでいたある女性の話です。昭和二十年代半ば、その方は神戸女子学院に進学しました。深江からあるいは本庄から神戸

女子学院へ進学する人は珍しいことです。ミッションスクールですから英語には特に厳しい指導があったそうです。入学した最初の授業から外国人による英語の授業がありました。彼女は英語の授業、特に英会話についていくことができませんでした。クラスの友人が授業中に英語のやりとりをするのを見て悔しくてたまりません。娘さんから、それを聞いたお母さんは、すぐ近くの深江文化村に住んでいた異人さんに英語を習うように手配しました。一年後、その方は少なくとも授業の英



写真2 津知の墓（昭和35年ごろ）左側の中央やや下の白い部分が墓地

会話程度には困らなくなりました。

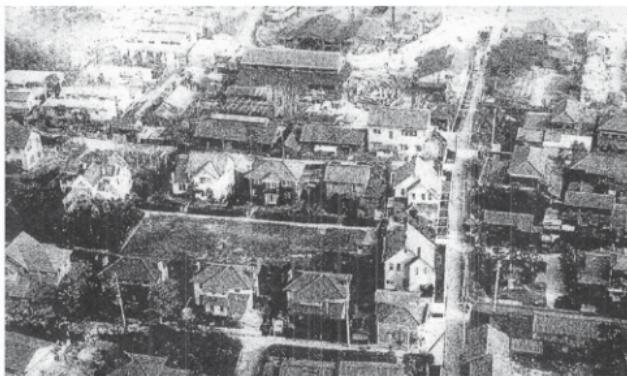


写真3 北の上空から見た昭和三十年前後ごろの津知川（画面右側、大西令子氏提供）

上が海岸で上の右端に太田酒造、左下が深江文化村

#### 津知川と津知の墓

今、深江では川が見られるのは高橋川しかありませんが、昭和四十五年まで、深江には西から高橋川、津知川、傍示川と三つの川がありました。津知川は芦屋市津知町付近からほぼ真南に流れ国道四三号線から南では、この川が深江南町一丁目と二丁目の境界になっています。昭和十三年の本庄小学校の卒業生の描いた地図には津知川沿いの道を「津知道」と名前をつけています。海岸から津知道を北に行けば津町、逆に津知から南へ下れば深江ということになります。戦前あるいは戦後しばらくは、深江と津知の二つの集落の間はほとんどが田と畑でした。田んぼの中の南北の二つの集落を結ぶ川であり、道であったわけです。

津知川を海岸から北に向かって歩き、国道四三号線に突き当たる少し南の深江南町一丁目に昭和四十年頃まで「津知の墓」と呼ばれる小さな墓地がありました。明治の中ごろの地図には小さな墓の記号がひとつだけ記載されています。西と北の道に面したところは幅約一筋ばかりの入り口があり一段だけの石段を上がるようになっていました。墓地の南には「焼き場」の跡地の空間があり、墓石の数は三〇ばかりです。

深江の墓地は集落の西のはずれにあり、この津知の墓は深江の住民にとっては村の東の外れにあるよその墓でした。神戸深江生活文化史料館の藤川祐作氏によれば、昭和四十年代の初めに、芦屋市が市営墓園墓地を整備し「津知の墓」も移転しました。墓が移転した後は金融機関が取得し不動産会社によって建売住宅として販売、現在に到っています。また、墓地の南に隣接してあった「焼き場」はNTTの通信基地として現在にいたっています。

昭和四十五年に津知川と傍示川は道路並幅を目的として暗渠になり暗渠になった川

まつら川と本庄川の境界で、元々は「津知川」と書かれていました。道は川幅分だけ広くなり、津知川の右岸は二車線で車がすれ違うことができるようになりました。傍示川は元々川幅が二倍に満たない川でしたから、暗渠にした部分を歩道とし、元の道の部分のみを車道とし両行きの一方通行道路となっています。

津知川は芦屋市津知町を抜けて途中では皿池（現在の宝ヶ池公園）などからの水を寄せながら海に注いでいます。暗渠になった今でも道路の下を水は流れ河口には水門が設けられています。

一方、北から南に流れる傍示川は、芦屋市津知町の境界付近で暗渠になると同時に西に折れ、少し流れて再び南に進みます。

その結果、阪神電気軌道から海までの従来の流れは殆どなくなりました。ただ暗渠の下にはかつての水路が確保されて海邊では開口部があります。水が流れいた頃には河口に水門が設置されましたが今は撤去されています。

ところで、この芦屋市と神戸市の境界である川の名前は「ぼうじ川」とも「ほうじ川」とも呼ばれています。同じ川でありながらその呼び



写真4 津知川神楽橋跡の石碑

ました。道は川幅分だけ広くなり、津知川の右岸は二車線で車がすれ違うことができるようになりました。傍示川は元々川幅が二倍に満たない川でしたから、暗渠にした部分を歩道とし、元の道の部分のみを車道とし両行きの一方通行道路となっています。

名が異なるのは不思議なことです。傍示川は芦屋市と本庄の境界であり、花園の境を示す言葉で「ほうじ」が本来の読み方といいます。寛延三年（一七五〇）に本庄と芦屋との境界を定めた山争いの裁許絵図にも「傍示川」が登場し、裁許を下した奉行の印が押されていました。

平成二十八年十二月に、六十歳台から八十歳台で、深江に住んでから三十〇年以上の方々一三名に聞き取り調査をしました。

質問は、「深江と芦屋の境界を流れている川の名前を知っているか?」「その名前をひらがなで書いてください」としました。ただ暗渠の下にはかつての水路が確保されて海邊では開口部があります。水が流れいた頃には河口に水門が設置されましたが今は撤去されています。

「ぼうじ川」か「ぼうじ川」か

ところで、この芦屋市と神戸市の境界である川の名前は「ぼうじ川」とも「ほうじ川」とも呼ばれています。同じ川でありながらその呼び

いすれも一丁目の方で五〇年以上今の場所にお住まいです。この方々



写真5 津知川を暗渠として拡張された道路 左側が文化村

は漢字からその呼び方をされているようです。一方、「ほ」と発音する人は字面ではなく、幼いころから大人たちが「ほうじ」と呼んでいたからということでした。あれこれと調べていろいろに交野市にある菅原神社付近に「中世無野街道傍示八王子」と書いてある石碑があることがわきました。この石碑にこのあたりの地名は傍示と書くが本来の表示は勝(ほうじ)で……略……延喜十七年(九一七)、平安初期に河内の国司に願い出て、国境の標識として勝示石を立てたのが「ほうじ」のはじまりという』という解説がされています。以上、芦屋と深江の境はこの川であり、境を示すため「ほうじかわ」



写真6 傍示川河口の水門跡

写真7 宽延3年山論裁許絵図に描かれた傍示川と芦屋川  
傍示川に境界を示す印が押されている

と人々は呼んだのはほぼ間違いないでしょう。  
新しく深江に移り住んだ人は地図にある漢字から「ほうじ」と呼んだのでしょうか。  
神戸市と芦屋市との境の川は幅二ほどどの水路ですが、暗渠となつての川の存在さえ忘れられてしまうのはそう遠くないのではないかでしょうか。

## ◇

取材に協力していただいた方々（敬称略）

富永義代子（大正九生、深江南町一丁目）・

花谷寛（大正十三生、平成二十四年没・新田君江（大正十三生、平成二十五年没）・伊丹弘忠（昭和二十三年生、深江南町三丁目）・岩本

嘉美枝（昭和十四年生、深江南町三丁目）・池田美津（昭和三十九年生、深江本町三丁目）

このほか、多くの方々に聞き取り協力いたしました。末筆ながら御礼申し上げます。  
本稿は、森口が取材執筆し、深江塾で報告、正美が文章を整えたものです。

飯田一雄・松下芳子・増田行雄・大国正美の助言を得て修正し、大國正美が文章を整えたものです。

## 【参考文献】

海道龍一郎著『百年の亡國』

秋山沙戸子著『ワシントンハイツ』

『阪神間モダニズム展』図録 関西西洋音楽のふるさと深江[文化村]『関西文学』一二〇〇四年十一月

## 「べっぴんさん」と史料館

史料館副館長 道 谷 卓



写真1 撮影に利用された水式冷蔵庫（上）とレジスター

NHKの平成二十八年度後期連続テレビ小説は「べっぴんさん」であった（平成二十八年十月三日～平成二十九年四月一日（計一五一回））。『べっぴんさん』は、ファミリアの創設者として知られる坂野博子さんをモデルにした作品である。この番組を制作する過程において

NHKから神戸フィルムオフィスを通して、史料館所蔵の資料を撮影に使用したいということ、番組が扱う時代についてアドバイスをしてほしいという依頼があった。平成二十八年四月九日、神戸フィルムオフィスの松下麻理代表とNHKの番組制作スタッフが来館し、史料館からは大國正美館長と道谷副館長が対応にあたった。番組が描く昭和初期から戦後の高度成長期頃までに使用された生活道具について、史料館所蔵の資料で撮影に適したものなどがあるのか、また、主人公が幼少期に過ごした家の雰囲気を理解するための一助とし

て深江文化村について教示してほしいなど、いろいろな角度から助言を求められた。

こうした依頼を通じ、最終的には、史料館所蔵の資料のうち、まとめて道具一式・水式冷蔵庫・レジスターの三点を番組の撮影で使用したいという正式な要請があり、史料館として正式に資料提供の要請を受け入れることになった。

神戸フィルムオフィスを通してNHKから、資料提供者に対して番組制作についての見学会を実施する旨の案内があり、同年八月十六日、道谷副館長と潮崎孝代研究員がNHK大阪放送局に行き、同局八階にあるスタジオのセットを見学した。スタジオのセットは、元町商店街をモデルにした「こうべ港町商店街」のセット（主人公すみれが子供服を最初に売り始めた靴店「あさや」のセットがメイン）。終戦後にすみれが暮らした木造のバラックの家（この家の内で、史料館のままごと道具が使われた）。そして、このセットはジェームズ山のジェームズ邸をモデルにしたようである。大阪梅田の闇市街のバラックの建物の三プロックに分かれていた。見学した時間は、撮影の昼休みの時間で、カメラの横にはそれまで使っていた台本が開かれたまま置かれていたりして、結構臨場感があった。見学後は、主人公のすみれ役の芳根京子さんが休憩中にもかかわらず控え室から出てきてくれ、挨拶をしてくれた。なお、この見学の際、スタジオセットの横にある倉庫にも案内され、史料館から貸し出したレジスターと水式冷蔵庫が、今後の撮影で使用することと、慎重に梱包され保管されているのを確認できた。

史料館から貸し出した資料のうち、レジスターと水式冷蔵庫は、主人公すみれがキアリスを立ち上げた昭和二十年代半ばから、昭和三十年代にかけての時代背景における撮影で使用されることになった。水式冷蔵庫は、すみれの自宅（戦後建てた木造の家屋）の玄関土間の調

写真2

すみれの自宅玄関の土間に置かれた氷式冷蔵庫

12月2日(金)放送より



写真3

大阪の百貨店の売り場中央に置かれたレジスター

(同上)



写真4

5週間に渡って流れた「神戸深江生活文化史料館」のテロップ(12月5日(月)放送より)



度品として置かれており、レジスターは、キアリスが出店した大阪の大急百貨店の売り場の真ん中にドンと置かれ、その存在感を示した。この氷式冷蔵庫とレジスターの資料一点は、放送の第九週(十一月二十八日～十二月三日)「チャンス到来」、第一〇週(十一月五日～十二月十日)「浦いの聖地へ」、第一一週(十一月十二日～十七日)「やるべきこと」、第一二週(十一月十九日)「十四日」「やさしい贈り物」、第一三週(十一月二十六日～二十八日)「いつものよう」と五週にわたり、番組の中でしばしば登場した。また、この五週の月曜日放送分では、オープニングのロップで資料提供者として「神戸深江生活文化史料館」の名前も登場した。

NHKの連続テレビ小説が、久々に神戸を舞台にしたことで、地元では、様々な団体が関連の事業を展開して行き、盛り上がりを見せた。NHKの連続テレビ小説が、久々に神戸を舞台にしたことで、地元では、様々な団体が関連の事業を展開して行き、盛り上がりを見せて



写真5 史料館にはポスターも展示。視聴率アップに協力した。「近くに住んでいたのに史料館を知らなかった。テレビで知って訪れた」という方も

いた。資料提供者として、「神戸深江生活文化史料館」の一文字がオープニングのロゴップで流されたのはわずか数秒であったが、視聴率二〇%を超える全国放送の力は偉大で、番組で視たという方から、当該資料についての史料館への問い合わせが数多くあったことは驚きであった。今回の資料提供を通じ、史料館の収蔵資料を多くの方々に知つていただくことができ、よかったですと思う。

#### 史料館の今後

## 児童館と図書館ステーション機能併設について

史料館は、昭和五十六年（一九八一）の開館以来、深江財産区の直営で入館料は無料として資料の保存と活用だけを行ってきた。財産区に多額の財源があり、高金利の時代はそれでよかった。史料館の運営費用は基本財産の利息でまかなえた。しかし震災復興で基本財産を減らし、さらにマイナス金利が長引き、財産区管理会の維持自体が厳しい事態になっている。

財産区管理会の中では一時は史料館の閉館も議題にあがつたが、過去から受け継いだ歴史遺産は、次の世代に引き継ぐ責務を負っている。一度失うとも取り戻せない。地域の歴史遺産は、どこにでもあるよう見えて、その地域のことを明らかにするものは、唯一そこにしかないものが少くない。また本誌で紹介しているように、日本放送協会の朝の連続ドラマ小説「べっぴんさん」の収録に史料館の収蔵品が使われたり、神戸文学館で展示に利用されたり、社会的ニーズも高まっている。こうしたこと私たち財産区管理会や地域の方々、あるいは行政にも粘り強く訴えてきた。

社会的ニーズに応えつつ、財政問題をどうクリアするか、ここ数年悩み続けた。すでに年間の運営費は設立当初からは半額に減らした。それでも財産区にしてみれば収入のない支出だけの施設に変わるのが難しい。史料館が収益事業をすればいいのだが、ボランティアで運営している状況では、難しい。一方で駅前にある立地は大きな財産でもある。その活用方法を、議論する中で、谷口貞澄前東灘区長をはじめとする行政の方々のお力添えで、現在二つの利用方法の検討が進んでいる。

一つは、三階をすべて児童館施設として神戸市に貸し出す案、もう一つは図書館の出先機関として、市民が予約した本を受け取ったり返却したりする拠点とする案である。少子化にも関わらず、東灘区はマンションの増加が著しく、深江地区は児童館施設のキャパシティが必要に追いついていない。小学校高学年まで対象を広げるという施策が打ち上げられていて、行政にとって児童館施設の拡充は待ったなしの状況にある。また、東灘区には住吉東町の区役所前に図書館があるが深江には図書館がなく、利便性が低い。この地に図書館のサービスポイントを設けたいというのも、行政の重点施策の一つだという。この両方の機能を史料館が担うこと、業務委託費や賃貸料を受けるという構想である。

いずれも税金ゆえに安定的に収入が期待でき、市民にとってもメリットが大きい。史料館にとってはスペースの削減や業務・資力の増加など、マイナスが大きいが、財産区管理会の財源の多様化に協力できる。またこれまで史料館に接点のなかつた方が史料館を訪れる機会が増える。住民サービスを向上させたいという、行政のニーズにもかなう。さまざまな課題が残っているし、財産区管理会の最終的な了解はまだ先だが、私たちは両方の事業を前向きにとらえている。史料館設立以来の大きな変化であり、現時点での方向を報告しておきたい。

#### 児童館開設

三階を神戸市ごと家庭局に貸し出し、児童館施設とする構想は、一月二十九日にごと家庭局が財産区委員会に二度目の説明を行い、協議入りに合意、現在細部を詰めている。

年度の後半に工事を行い二〇一八年四月から供用開始の予定。平日は放課後から午後五時（延長は午後七時まで）、土曜（代休日含む）は午前九時から、学校休業日は午前八時半から三階がすべて児童館になる。三階にある民俗資料や書籍などは、選別し、使用頻度の低いもの

には、深江浜町の神戸市東部卸売市場に空きスペースを提供してもらうことになり、そこに移転する。これに伴い、館長室を打ち合わせもできるスペースに改造できないか、検討中である。展示施設も一部縮小せざるを得ない考え方である。これまでの大規模な変更は昭和五十八年（一九八三）の増築以来で、今年は多忙が予測される。ただ土曜は三階を全く使用できないのは、史料館活動に大きな障壁を生む。一方児童館は、土曜は人数が少ないので三階を半分利用できないか申し入れており、今後の協議になる。

#### 図書館機能の設置について

図書を借りるときは図書館に出向いても、返却のためだけに出向くのは不便だし、予約した本を受け取る施設があれば便利という発想で、神戸市は市内の各地で順次拠点整備を進めている。

深江から東灘図書館は遠く、足場のよい芦屋市立図書館の利用の要望がある。しかし芦屋市側は神戸市の利便性を高める努力が先決との姿勢で、ます深江に図書館の拠点を設ける構想が浮上した。

一月三日、神戸市立中央図書館より、史料館での予約図書受け取り・返却コーナー事業について、説明を受けた。週一日、土日の午後四時間という構想案である。東灘区のまちづくり課と、中央図書館、財産区管理会の三者が史料館維持の精神的な協定書を結び、業務について史料館と中央図書館が委託契約を結ぶことで調整している。図書の返却を史料館で受け付け、また予約した本を貸し出し、史料館員がパソコンの端末で処理する。

図書の貸し出し・返却業務は個人情報を扱うことになり、神经を使ふ。一方読書人は、史料館と親和性が高いとも思ふ。新しい住民も少なくない。「あら、こんなところに、こんな施設か……」と思ってもらえるのではないか。史料館存続に尽力していただいた多くの方に感謝しつつ、期待に応えたい。

（文責・大國正美）

## この一年あれこれ

史料館研究員

藤川祐作

史料館は一般見学のほか、小学生の授業見学が十月から始まり、一、二月に集中して来館している。今年度は、小学生の団体見学に加え、資料の問い合わせ、大学生の史料館での実習、ミュージアムフェアへの出展、NHK放送局や神戸文学館への資料貸し出しなど多彩な活動をした一年だった。主なものを紹介しておく。

恒例のトライやるワーキーでは、五月三十三十一日には本庄学一年の鬼塚真大君と手島海人君が深江会館で、六月一二三日には両君のほか、土井觀月さん、佐賀紗音さん、今里星凜さんを加えた五人を史料館で受け入れた。五人も一度は受け入れたのは初めてで、民間企業が受け入れに消極的になっていたことの反映である。

樋口・藤川研究員指導のもと、二日午前中は一階の季節の展示コ一ナーの入れ替え、午後には保久良神社一帯で採集された弥生土器の水洗いを行い、三日午前中は史料館の館内事務の手伝いを、午後は化石の観察と正寿寺の古瓦の柘木を取る作業を行った。生徒に感想を尋ねると、土器洗いと柘木取りが楽しかったという返事が返ってきた。七月八月には京都女子大学四回生の上柏帆帆さんが卒論研究で、深山家の種痘カルテ調査のために数回来館、「写真撮影に樋口研究員が対応してもらつた」。

八月には甲南大学文学部四回生、久世成美さんの博物館実習を受け入れた。これまで大学教育の一環で館員が講義をしたり、史料館が現地見学に使われたりしたことは再三あったが、博物館実習で学生を受け入れるのは初めてで、史料館の社会的な役割が一段と重くなつたと感じた。八月六日は連続と図書整理を大国館長が担当、七日は藤川が

午前中、甲南大学周辺の歴史の概論を、午後は土器や瓦の拓本取り、二十七日も藤川が土器の実測や資料の写真撮影・整理を指導した。二十八日は大国館長の指導のもと古文書の調査と整理を体験した。午後は館員全員と一緒に季節の展示替えなどを行った。中学生のトライやるワーキーと違い、資料を現地で保存し公開する意義、民間所蔵史料を民間が保存する「草の根アーカイブ」の意味、未整理史料を調査する場合の現秩序維持の原則などを強調して説明した。十二月には学内で博物館実習の成果を発表する場があり、久世さんはボスター形式で実習内容を報告、「柘木の採拓、土器の実測、古文書の調査・整理、実際に展示するなど、普段できない貴重な体験をすることができた」。また夏休みの課題で訪れた学生に對して文献資料を探して見せてあげたり、説明していた様子が印象に残っていて、学芸員の仕事が資料の収集・保存、展示だけではないことがよく分かった」と感想を披露してくれた。

六月と九月には神戸文学館に展示品を貸し出した。六月は「細雪」姉妹たちの神戸一展でままで道具・化粧道具類を、九月は「金田一耕助の神戸」展で、耕助のトレードマークのトランク、「悪魔の手足唄」に登場する樹・手錠などを貸し出した。

また秋には、かつて青木にあった弓道場の調査で、尼崎弓道俱楽部の吉原大作氏が数回来館した。弓道場の存在は初耳で、本号に報告を書いてもらつた。

十月初から始まったNHK朝の連続テレビ小説「べっぴんさん」へは、レジスター・氷式冷蔵庫・ままごとセットを貸し出した(道谷副館長が本号で詳報)。特にレジスターは、すでに廃校になつた芦屋市大原町の田中千代服飾専門学校の一角にあつた学校教材を取り扱う店舗で使われていたものである。田中千代氏は昭和三(一九二八)年から三年間、夫田中薰氏に付き添つて渡欧し、フランス・スイス・ドイツなど



写真1 一度に5人を受け入れたトライやるワーク



写真2 展示替えを行い晴れやかな顔

写真3 京都女子大学4回生の卒論研究で



に滞在、ファッショングに関心を高めた。帰国後、住吉村（現神戸市東灘区）の自宅で洋裁教室を開き、昭和十二年（一九三七）には本山村（同）で洋裁研究所を開き、戦後昭和二十二年（一九四七）芦屋で田中千代、洋裁研究所とした（阪神間モダニズム』一九四七年）。平成十六年（二〇〇四）に専門学校は廃校となつた。阪急芦屋川と当時の国鉄芦屋駅を直線で結んだ位置に学校があり、道路いっぱいになつて女学生が通学していたことを思い出す。

「べっぴんさん」のドラマのモデルとなった子供服メーカーのファミリア創業者、坂野俊子と田中千代とは時代が若干異なり重ならないが、ファミリアと田中千代の間に接点はあったようである。ファミリアは三宮セントラル街西端のドンタクの向かいの角に昭和二十五（一九五〇）年出店するが、その前年の昭和二十四年には一階にレナウンが直営店を、二階に田中千代がデザインルームを置いたが、直営店に対して業者からのクレームが付き、早々と退店したあとに出店したのだという（居留地研究会の高木恵光事務局長のご教示による）。

一年を振り返って、今後とも資料の受け入れ、問い合わせに積極的に対応し、だれの目にも存感のある史料館になるよう、日々努力しなければならないと痛感した。

## 史料館日誌抄

史料館副館長 道 谷 卓

△○一六年▽  
△○一六年四月△一七年三月

4月9日 NHK大阪放送局「べっぴんさん」スタッフ8名、ドラマで使用する収蔵資料の打ち合わせのため来館、ままごと道具一式水式冷蔵庫・レジスターの3点を貸し出し

5月7日

頭にいのりウォーク

(参加者一二名)

5月27日 東灘区役所職員研修

(見学者四一名)

6月2日／トライやる・ウィーク・本庄中学校二年生五名を受け入れ一日間史料館業務の体験

(見学者四一名)

8月6日△甲南大学学生一名、博物館実習のため受け入れ

(見学者二一名)

8月27日

東灘区役所職員研修

(見学者四一名)

10月2日△トライやる・ウィーク・本庄中学校二年生五名を受け入れ一日間史料館業務の体験

(見学者四一名)

10月14日 六甲小学校三年生

(見学者八〇名)

10月19日 本山第三小学校三年生

(見学者一二五名)

10月24日 福住小学校三年生

(見学者九六名)

10月28日 本山第二小学校

(見学者一九五名)

△○一七年▽

1月13日 本山第一小学校三年生

(見学者一三九名)

1月16日 八多小学校三年生

(見学者二三名)

1月20日 甲南小学校三年生

(見学者六三名)

1月20日 宮本小学校三年生

(見学者四九名)

1月23日 向洋小学校三年生

(見学者一二二名)

1月24日 种田小学校三年生

(見学者九六名)

(見学者九一名)

(見学者一五一名)

1月25日 本山南小学校三年生

(見学者一五一名)

(見学者一五一名)

1月25日 福池小学校三年生

(見学者一五一名)

(見学者一五一名)

1月27日 御影小学校三年生  
(見学者一二一名)  
1月30日 東灘小学校三年生  
(見学者一七〇名)  
1月31日 本庄小学校三年生  
(見学者一一一)

2月1日 瀬小学校三年生  
(見学者五一名)  
2月7日 六甲アイランド小学校三年生  
(見学者五〇名)  
3月2日 高羽六甲アイランド小学校三年生  
(見学者一二一)

(見学者二二一名)  
(見学者一七〇名)  
(見学者一一一)

## 資料寄贈者△芳名

近沢孝昌

(藤川祐作記)

## 編集後記

青木に戦前立派な弓道場があったことが分かりました。それも偶然の問い合わせがきっかけ。長く続けていると、様々な方が問い合わせの拠点にしてくれます。答えられないことも多いですが、今回は場所も特定でき、成果につながりました。今年史料館は開館以来といつても過言ではない変身を遂げます。すべては存続のために。引き続き支援を(大団)。

「生活文化史」 第45号 2017・3・31

編集／大國正美

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-21 神戸市東灘区深江本町3-15-7  
078-8453-14980 (FAX兼用)

<http://fukae-museum.jp/>